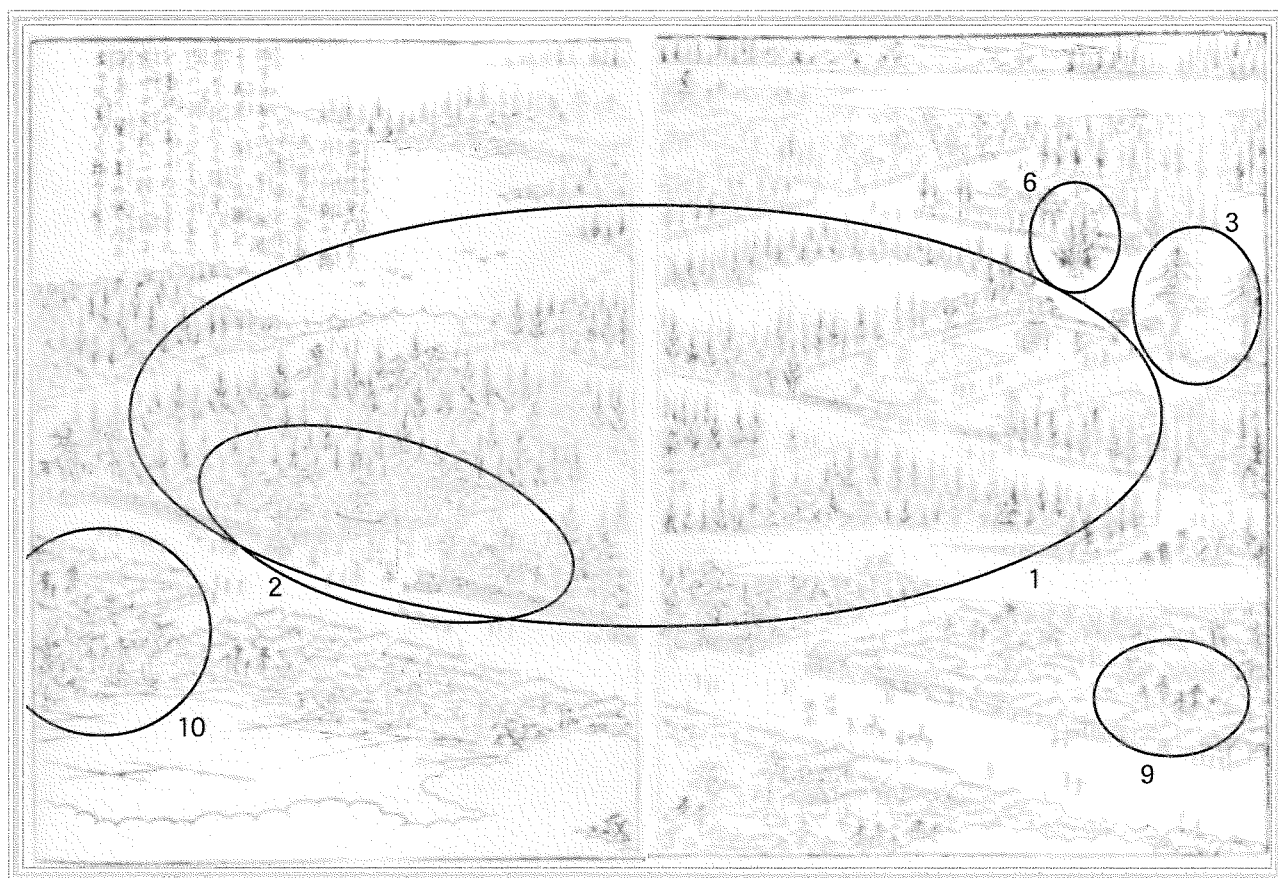


# あるむぜお58

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO 58

2001年12月20日



2 ケヤキ並木 Part3 府中六所宮にケヤキを探せ

3 展示会への招待 「2001 ワイルドライフ写真大賞展」

4-5 ノート 川の自然観察考 流れと生物

6 最近の発掘調査 小柳町で古墳を発掘

7 収蔵資料の紹介 将門の乱と武蔵国～『将門記』

8 ナチュラルセブン 第7話「史上最大の観察」(前編)

表紙写真 『江戸名所図会』より「府中六所宮」(本館所蔵)

現在の大国魂神社の境内を、高い視点から3画面のパノラマ風に描いています。驚くほどリアルで、正確に描き分けられた樹木の種類まで、見当できそうです。長谷川雪巨画。天保元年(1830)刊。

府中六所宮にケヤキを探せ

府中の街のシンボルとも言える大国魂神社のケヤキ並木。今回は『江戸名所図会』のパノラマ画を丹念に探りながら、ケヤキの雄姿を見つけることにしましょう。「ウォーリーを探せ」ではなく「ケヤキを探せ！」

甲州街道に面した鳥居の南側(図では右側)に広がる広い境内は、大部分、針葉樹のスギで埋め尽くされているのがわかります(1)。かつては、日も射さぬほどのスギ林だったといい、貞享3年(1686)の古文書では668本を数えています。その後徐々に減っていったようで、1960年頃までにはほとんど消滅してしまったのは残念です。

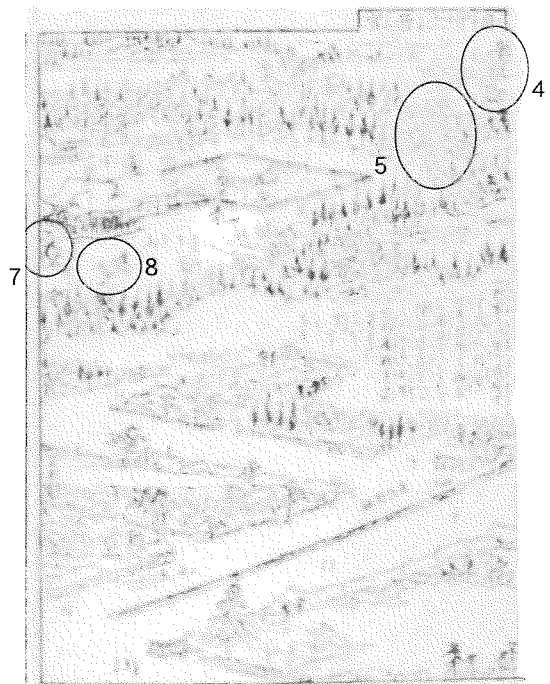
鳥居の左右にある落葉広葉樹っぽい木(2)は何の木でしょうか。「武蔵野の春」と題を付けたくなる安政3年(1856)のスケッチ帖(本館所蔵、井の頭・小金井桜・六所宮の3葉からなる)を見ますと、何とその部分にはピンクの花が咲いているではありませんか。答えはサクラです。

スギに囲まれた正面の道を進み、随神門を潜りさらに行くと、スマートな巨木(3)が2本出向かえてくれます。木の間には注連縄が渡され、「注連樹」とも書かれています。形からいっても、ずばりモミの木ではないでしょうか。というのも、大国魂神社の七不思議に一年中絶えない「縦の霰」というのがあります。文化12年(1815)の古文書にモミの大木が4本あったことが記され、現在も場所はちょっと違いますが、随神門の前に古いモミがあります。ただ、本書本文中の「注連樹」は別にあり、「本社の後ろ蒼林のうちにあり、櫛の枯株にして数十圍あり」とされ、社殿の裏に描かれています(4)。樹齢千年で今も健在の大イチョウ(5)はその手前に見えています。

拝殿の近くには、ひときわ大きなスギ(6)、源頼朝伝説のある「矢竹の根」(7)、ヤナギの木(8)なども見つけることができます。また、「境内に松の木なし」という伝説のとおり、神社の周りの社家屋敷や街道沿いの民家には見られるもの(9)、境内にマツらしき姿を見つけることはできません。

さて、鳥居から北側(左側)に伸びるはずの参道に目を向けてみましょう。やはりありました。残念ながらそれより左は画面が途切れてしましますが、ケヤキらしき風格の古木が、道の両側に少なくとも5本確認することができました(10)。『武蔵名勝図会』に「土手の上に楓の列樹、左右に相並びて古木森々として幽邃なり」とあるような景観の一端を見て取ることができそうです。

当時ケヤキの並木が珍しかったことは、本書の膨大な挿絵をめぐっていくことによってもわかります。たとえば、同じ府中の国府八幡神社や大宮氷川神社(さいたま市)の参道はマツ並木、平塚明神(北区)はスギ並木です。もっとも、近世の武蔵野新田開発にともなう屋敷林や街道の並木として、ケヤキはたくさん植えられることになりました。今日残る青梅街道最大のケヤキ(小平市)は寛文年間(1661~1672)の植樹と伝えられていますが、ケヤキといえば、雑木林とともに武蔵野の代表的な景観のひとつとなりました。府中六所宮のケヤキはその先駆けともなっているのです。

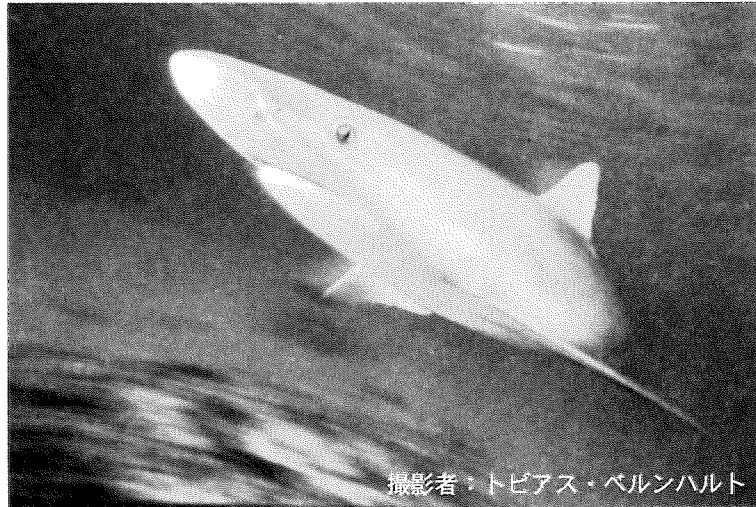


表紙写真に続く



BBC ワイルドライフ誌+英国自然史博物館による

# 「2001 ワイルドライフ写真大賞展」



撮影者：トビアス・ベルンハルト

ちょっとむかしのエピソード…  
アメリカでごく普通に使われているウェブスターの辞典から引用…  
「ワイルドライフ」：人間でもなく飼養されているものでもない生き物。特に人間の狩猟対象となる獣や鳥や魚のことである。

さてさて、本家本元イギリス人の信頼するオクスフォード大辞典には何と書…な、ない！「ワイルドライフ」という単語が見当たらない…

やがて、大西洋をまたいで両国の親類縁者が文通を続けていく中で、イギリス人も「ワイルドライフ」という言葉を使うようになった。しかし言葉は海を渡っているうちに、少々意味の変換や脱落を伴ってしまったようだ。「ワイルドライフ」の場合は、ウェブスターの定義が冒頭部分だけ旅をしたのである。

この結果、イギリスにおいては植物までも「ワイルドライフ」の範ちゅうに入れられているのに対し、アメリカでは動物に限られている。時には「ワイルドライフ」から魚も除いて、この語を狩猟鳥獣と同義に使うこともあるようだ。

この際、米英両国の見解の相違についてはどうでも良い。イギリスから毎年やってくる素晴らしいネイチャーフォトには、ちゃんと植物も魚も、果ては雄大な自然景観までも含まれているのだ。

**郷土の森博物館も同様の見解を示そうと思う。**

大多数の人たちは、都市に居住す

るようになってから、その向こうに存在する野生と呼ばれるものとの接触を無くしてしまった。人によっては、まさに忘れ去られた存在と言って良い。このような人たちは、大きなダム建設を妨げる理由に小さな魚が使われたりすると、仲間である人類に狂気が広まりつつあると錯覚し、辛辣な批評で攻撃を加えたりしたものだ。

ごく最近、人は地球という惑星の生態について多くのことを学んだ結果、野生の存在なくして人類は果たして生きられるのか、という疑いを持つようになった。つまり、この星の生命はひとつであり、命あるものすべてが生態系と呼ばれる複雑な網の目の中で、ともに結び合わされていることが理解されたのである。人類と自然の結びつきについては、まだまだ未知の部分が多い。それらを解明するために自然界のすべてを保存しておく必要があるのだ。もちろん、植物も魚も、そして人類をも含めた「ワイルドライフ」として…

(T. Nakamura)



撮影者：ヴァンサン・ムニエ

2002/1/27 (日) ~ 3/31 (日)

2/4・3/22は休館

**日本に再上陸する新たなサプライズが、あなたの感性に突き刺さる！**

# 川の自然観察考

## 流れと生物



博物館南縁を流れる多摩川中流部

「水は山をかいて谷をみだし、できれば地球を完全な球形に復原しようと欲しているのかもしれない」

これは、今から450年以上も前にレオナルド・ダ・ビンチが自らの手記に綴った、力強い「川」のイメージです。大地を刻み、谷を埋め、そして海に広がっていく「川」、その過程において、陸地の様相を時々刻々と変化させてゆく程に偉大なるパワーを秘めた「川」。

「海」や「湖」といった地球上におけるあらゆる形態の水の中で、意外にも「川」の水はほんの0.0002%を占めるにすぎないといえます。しかしながら、そのわずかな「川」という存在を通じて、地球上の水が結び合っていることは皆さんもよくご存知でしょう。「川」は生物で例えれば体内を走る血管に等しく、破れたり詰まったりすれば、地球の命取りに繋がるほど重要な役割を担っているのです。

また一方で、古くから人間との結びつきも深い「川」は、多くの文明を育んできました。今現在に至っても、治水利水を始めとする様々な活用が施され、比較的人工部分の多い自然環境として成り立っています。当館でも度々多摩川での自然観察会を実施しますが、植物・昆虫・野鳥といった生物分野だけに限らず、人手の加えられている箇所にも注目しながら、ひとつの環境として捉えています。「川」の自然を観察する場合、自然特性や四季の流れと共に「川」そのものを観察する必要があるということなのです。

### ▼ 川の形態

太陽熱によって海から蒸発した水は、やがて雲となり地上に雨を降らします。雨の一部は地表を伝わって直接川へ流れ込んでいき、また一部は地中にしみ込んだ後、やがて湧水として地上に現れ、川へと流れ込みます。川の水は長い距離を流れる間にわずかに蒸発していきませんが、一部は飲料水・農業用水・工業用水として利用され、再び川へ、そして一部はそのままゆっくりと海に流れ込んでいきます。海に流れ込んだ水は再び蒸発し、雨となって再度地上に戻るのです。このように地球上の水は、先述のとおり川を媒介として巡り続けています。そして何よりも特徴的なことは、外的要因により、川はたえず水量を増減させながら、あくまで一方向にのみ流れるというシステムです。

川の観察で重要なことは、どの部分を見ているのかということです。簡単に言えば上流・中流・下流の区分に他なりません。一般的に瀬が多く、流れの早い区域を上流、瀬が少なく流れの緩やかな区域を中流、よどみ流れる区域を下流と分けています。但し川の形態は千差万別であり、必ずしもこの規定通りには当てはまりません。関東最大の利根川にしても、感覚的には規定の区分と一致しますが、全体的に急流の河川であるため細かい判断は難しくなっています。あるいは北陸や屋久島の川のように、河口まで山が迫っており、流速が小さくなってよどみを呈するという規定上の下

流が見当たらないものもあります。

こうした区分が困難な時には山地流・平地流といった表現をよく使います。つまりは山地の急な勾配を流れる流速の早い川、平地の緩やかな勾配を流れる穏やかな流速の川に大別するのです。諏訪湖岸を流れる天竜川を例にとれば、明らかに上流の区分である所が形態的に中・下流の様相を呈し、その後急流を経て再び緩やかになっています。この場合、平地流—山地流—平地流の形で理解すれば良いのです。

スケールを表すため、俗に「河」とか「川」の呼び方で分けられる傾向にありますが、実際にはヨーロッパやアメリカ、中国などの大陸にある大きな河と、日本国内にあるような小さな川といった表記上の違いであり、厳密な規定は存在しません。

### ▼ 流れと生物

淡水に生きる生物たちにとって、生活場所を制限するのは水の流れです。流れは多くの場合、生活に必要な溶存酸素の溶解、栄養塩類の運搬の他、プランクトン等、動植物の発生などを左右する主要な要因になっています。陸地にある生活圏としての淡水域のうち、湖や池沼を静水域と表現するなら、川はまさしく流水域といえます。しかしながら川は瀬と淵、すなわち流水域と静水域が繰り返し作り出される環境です。

上流部は勾配が急で水流も速く、河床は大きな石礫で覆われます。水中の栄養塩は乏しく、一次生産は専ら珪藻などの石礫上の付着藻類によって行われ、プランクトンは見られません。むしろ周辺の陸地からの落葉枝が水生昆虫などにとっては重要な資源となっています。魚類は主に肉食性で、水生昆虫や流れてくる陸生の昆虫を餌にしています。

栄養塩類と有機物が次第に増加する中流域では、生物生産は高くなり、藻類食や雑食の魚も生活するようになります。下流域では砂やシルトの堆積により、川岸に水生植物が繁茂し、餌生物や生息場所が多様化す



多摩川大丸の堰（川の人工環境例）

るので食物連鎖が複雑化し、魚食性の種類も増えてきます。流れが遅く大気からの酸素供給量が低下する上、増加した有機物の分解によって水中の酸素量が不足しがちなので、底生動物の構成も低酸素に耐えながら堆積物中で生活する貝類が多くなります。

川の生物群集は、このように気候条件が同様であれば良く似た構成と流程に沿った移り変わりを示します。天候によって水量が大きく変化する川は、大変不安定な環境です。特に上流域ほど激しく、そこに生息する者たちにとってはまさしく流れを利用した生活スタイルが要求されているのです。

今年の世界湖沼会議では、水辺に生息するヨシが水質浄化に重要な役割を果たすとして最注目されたこと、湖沼や河川の水位を変化させ生態系を回復することが議論される旨、11月5日付の朝日新聞に掲載されました。岸に生えるヨシは侵食から身を守るため、水位は下げられたほうが好ましいのですが、反対に魚が水辺に産卵するためには、水位は上がったほうが良く、お互いのバランスを考慮しながら治水利水を施す必要があるというわけです。

かつて冬の少雨や梅雨などで大きく変動していた湖沼や河川の水位は、人間の都合で操作されるようになりました。利水に必要な最低水位と、洪水を防ぐための最高水位が定められ、多くの場合はこの中間の「基準水位」に安定させています。国土交通省は環境保全策として、90年頃から護岸の材料をコンクリートに代えて自然石を多用したり、川を蛇行させたりしていますが、水位変動に対する認識は薄かったようです。

流れの中に棲む生物にとっては、安定した川よりも常に変動を続ける川の方が最適な自然です。かといって河原に生活圏を持つ植物など、種類によっては安定をのぞむものも存在しており、なかなか両立は難しいようです。保全策が施されているとは言え、近代治水では洪水時に出来るだけ早い時間で水を流すべく、蛇行した川をまっすぐにしてしまう傾向が強くなり、その際強引に流れを変えるための堤防強化で、コンクリートの砦があちらこちらで目立っています。このような安定優先に基づく、川に対する人間の介入度合いを考えれば、常に姿形を変えて流れる激しい川のイメージは少しずつ薄らいでいくようにも思えます。私達には今一度、川本来が持つ生態系の理解が必要でしょう。川は決して単なる排水路ではないのですから。

川…源流から河口までの流れはまさにひとつの生命であり、そこには連続した生態系が生じ、無数の生物たちの宇宙が存在します。川を観るということは、人の一生のごとき水の旅を感受性をもって接することなのかもしれません。

最近の発掘調査

# 小柳町で古墳を発掘

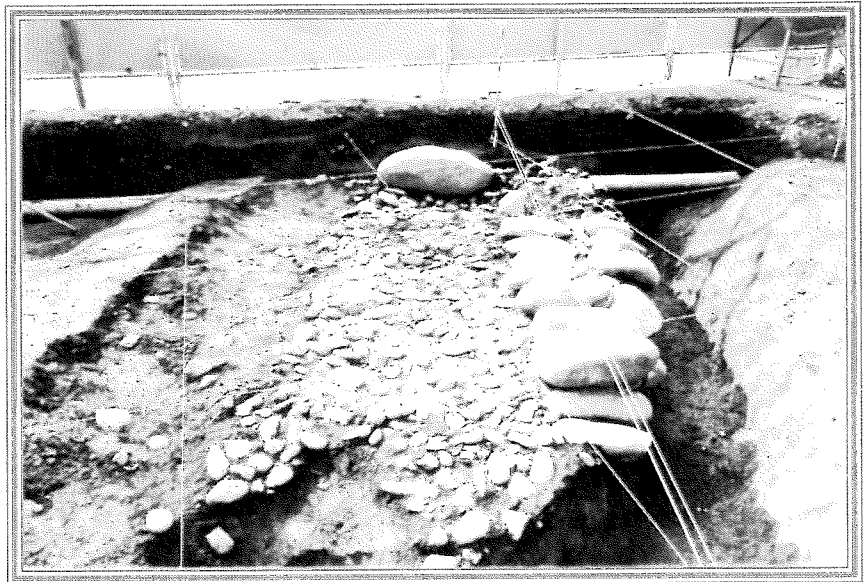
小柳町1丁目 木村宅地区から  
府中市遺跡調査会 西野 善勝



高倉塚古墳 (2000年初秋撮影)

## 市内に残る古墳

市内には、高まりを残す古墳(推定を含む)がいくつかあります。西部では分梅町に高倉塚古墳(2001年11月市史跡に指定)・天王塚、美好町に首塚・大塚、西府町に洞穴があり、東部では白糸台に龔塚があります。これらの地域には、固有の名称こそないものの、他にも古墳と考えられる塚状の高まりが残っています。身近にある古墳を巡り、古代の風景に想いを馳せ、ひとときを過ごしてみたいかがですか。



横穴式石室の残骸 (北から)

10月に実施した調査で、新たに古墳が発見されました。調査地は、多摩川に沿って続く府中崖線と呼ばれる崖の縁に位置します。川の向こうに多摩丘陵を望む見晴らしのよいところです。秋も深まりつつある時期でしたが、汗ばむ陽ざしのなかでの調査でした。

そこは、古墳を思い起こさせるようなものではなく、わずかに勾配をもつ南向き斜面でした。調査を開始してまもなく、小石に混じって30cm大の河原石が並んでいるのが目にとまり、そのうちの一つは70cmほどある大きなものでした。その後の調査により、これが古墳の石室の残骸であることが判明したのです。河原石は、横穴式石室の底面(床面)と西側の壁の下部にあたり、大きな石は南側にある羨道部と呼ばれる通路をふさぐためのものでした。東側と北側はすでに破壊されていましたが、石室内からは副葬品と考えられる丸玉25点、勾玉2点、鉄鏃を含む鉄製品4点が出土し、周辺から須恵器の破片が出土しました。古墳と言うイメージからすると、ささやかな内容です。しかし、郷土の森博物館に保管されていた鉄刀3振り、30年ほど前の造成の時に、この古墳から出土したものとわかり、再発見となりました。

多摩川流域には4世紀から7世紀の古墳が分布していて、府中市周辺の中流域では、6世紀から7世紀のものがあります。未調査分もありますが、市内では京王線分倍河原駅西側の高倉古墳群で33基、京王線武蔵野台駅付近の白糸台古墳群で9基が発見されています。

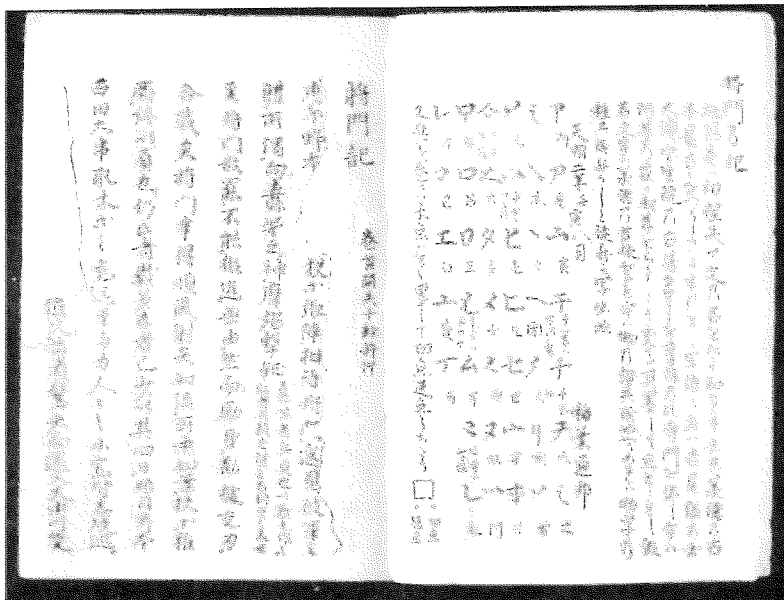
今回の地域は、白糸台古墳群につづく古墳集中地区で、すでに調査されたもの3基と、古墳と推定されるものが2基があります。今回発見のものは、最も西に位置し、時期は6世紀末から7世紀前半と考えられます。古墳全体の姿は石室の規模から推定すると、直径10~12mほどで、円墳であつたと考えてよいでしょう。

この古墳を築造した人々が居住した集落は、今のところ見つかっていません。府中市内では3か所で古墳時代の住居跡が発掘されていて、小柳町の西方に位置する清水が丘西遺跡が今回発見された古墳に最も近いところにあります。4世紀代の集落跡ですが、この近く古墳を営んだ人々のムラもあつたと考えられます。

収蔵資料の紹介

# 将門の乱と 武蔵国府 ～『将門記』

小野 一之



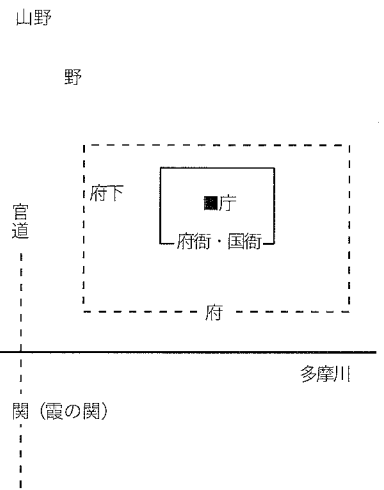
平将門は、平安時代の中頃、関東を舞台に大規模な反乱を起こした人物として知られています。一族は桓武天皇の子孫で、下総国北西部（茨城県）を基盤に勢力を築いていました。一族内の激しい抗争を経て、国家に対する反乱に発展したのが、天慶2年（939）、翌年には鎮圧されます。同じ頃、瀬戸内海を舞台に藤原純友も反旗を掲げ、東西呼応したかのように見えた事件に、京都の朝廷は度肝を抜かしたはずで、**将門記**は、将門の乱の顛末を詳しく記した書物で、平家物語や太平記のような軍記物のいわば走りです。乱の終結後、さほど時代が下らずに本書はまとめられたようですが、現在知られる最も古い写本は、名古屋の真福寺所蔵のもので、承徳3年（1099）の書写といえます。今回紹介するのは、この真福寺本を江戸時代の寛政11年（1799）に刊行したものです。原本の破損の箇所まで線でなぞっております。

**武蔵国府**は、この将門の乱の重要な舞台の1つになりました。そもそも国府は一国の政治の中心ですから、軍事行動の目的地になったり、合戦の場になったりすることが少なくありません。源頼朝が挙兵して鎌倉入りするまでの間の安房・下総・武蔵の国府、新田義貞による鎌

倉攻めの際の上野・武蔵の国府などもそうでした。国府の相対的な地位が高かった平安時代中頃ではなおさらのことです。その頃、武蔵権守興世王と介源経基は、判官代で足立郡司の武蔵武芝と抗争を続けていました。都から来た国司と地元の有力豪族との紛争は、当時よくある対立の構図で、力を付けてきた将門は、これに介入しようとしたのです。将門記は、その時の様子を詳しく書いていますが、幸いなことに国府の構造に関する言葉が散見できます。国司が詰める場所は〈府衙〉〈国衙〉、そこには〈庁〉があり、住民がいるのは〈府下〉、街全体は〈府〉という具合に使われています。武芝が一時逃げ隠れたのは〈山野〉〈野〉でした。曾我物語という本に書いてあるように、霞の関（多摩市関戸か）を設けたのは将門だという伝承も興味深いものがあります。以上のことをざっとまとめてみると、図のようになるでしょうか。

**将門伝説**という言葉がよく使われるように、将門に関わるエピソードは、現在も関東を中心に数多く伝えられています。東京多摩地域では、青梅市周辺の将門伝説が有名です。将門が居た城の跡、将門が建てた寺、お手植えの梅の木など

というものであります。府中には国府があったせいか、将門ではなく、将門を滅ぼした側の藤原秀郷の館跡だという場所があります。市内片町の高安寺がそれで、境内には秀郷稲荷が祀られています。宮西町の称名寺は源経基の館跡とされています。江戸時代後期以降、多くの伝説が創られ広められていった背景には、本資料のような刊行物が読み継がれ、人々が歴史上の英雄を知ることになっていった状況が考えられると思います。



武蔵国府概念図  
(将門記と曾我物語による)

# ナチュラル セブン

## 第7話 「史上最大の観察」(前編)

中村 武史

事実に基づいた創造の世界もいよいよ最終章を迎える。7つめのエピソードは、1999年夏、当時博物館で開催中の展示会、「ふしぎ大陸・南極展」会場内のシーンから……

先日の園内散策以来、自然調査団員の揃う機会は増え、今回も市制45周年事業として開催の、本展招待を受ける形で全員集合と相成った。「いやあ、実に興味深いねえ、南極観測イコール地球環境ウォッチングってわけだ。」「本当、全く驚きですな、これだけのデータが一網打尽にできるんだから、まさにこれ以上の観測はないですよ。」団員同士の少々興奮気味の会話がはずんで、非常に盛り上がっている。感心の対象は、南極の特性にあった。そもそも工業活動を含めた人間の活動拠点は、北半球に集中している。南極はこれらの

直接的影響を最も受けにくい遠く離れた位置にある。つまり地球の環境変化を知る上で、最も基礎となる情報を確実に、かつ正確に収集できるのだ。しかも採取される隕石・岩石・氷床は、地球の過去情報を集積したタイムカプセルのような存在であり、現在・過去・未来における環境変化をモニタリングする最高の場所にもなっている。

「我々の自然観察会なんて、考えてみりゃ地味なものだよなあ……やっぱりこう、皆が驚くくらい大規模な内容でやりたいよね。やあ、南極観測素晴らしい！」目を輝かせながら地理班のシマムラ班長が感嘆の声をあげた。間髪入れずにソーマ副団長、「郷土の森も観察場所として皆さんの認知を頂いたわけだし、これも含めて府中の代表的な環境である多摩川・浅間山・段丘崖の自然が網羅できるような観察会が出来たら良いですよ。」イブズミ団長は現実的な意見で、「それは大変結構ですが、全てを盛り込み過去に例を見ないような観察会ともなれば、経費や負担が大きくなりますから、いっぺん博物館側とも相談しなければね。」と結んだ。

事は早急に進み、かくして舞台は博物館の会議室へと移る……「なるほど、魅力あるご提言と思いますが、具体的にはどういった内容で？」館長が半信半疑の面持ちで問う。これが進撃合図となり、夢の企画が

次々と披露された。植物班は多摩川・浅間山・段丘崖において方形枠を使った植生調査を行い、優占種を求めて緑の観点から府中の自然度を割り出す内容を示した。野鳥班も大量の参加者によるバードセンサス体験から、果ては浅間山の林で縄張り調査をテリトリーマッピング法を使って行うとの企画。昆虫班に至っては夜間の実施を訴え、トラップに集まる虫を観察することを熱望した。地理班はよほど南極展から刺激を受けたのだろうか、南極の氷柱採取よろしく参加者の目の前でボーリング掘削による地層柱状標本の採集実演をぶち上げた。各班よくぞ考えついたものであるが、それぞれの分野中心の主張を押し付けた多分にマニャックな内容であることは明らかだった。さて激論の

行き着く先は……

「何を言っているんだ！博物館の観察会でやる内容じゃないよ。ボーリングの機械？工事現場からでも借りてくるんですか。」「緑の優占種？一般参加者のうち誰が植生調査のノウハウを持っているんだ！」「テリトリーマッピング？そんな高度な技術がインスタントで理解されるんですか！」機関

銃の速射のように言葉の弾丸が飛び交い、もはや会議は国会のヤジ合戦のごとき様相を呈したあげく修羅場と化した。「何だよ、折角良かれと思って提案しているのに、結局最後はいつもこうだ！この間の園内散策からどうも皆さん、自分勝手過ぎやしませんか……これで失敬する！」席を立ったシマムラ班長に続いて各々捨てゼリフを残してその場を去っていった。重苦しい空気が部屋中を包んでいた。

イブズミ団長が途方に暮れる。「我々の団結が、こんな程度のもだったなんて……力不足だったのかなあ、私は。」南極展を発端に、予想もつかない危機が訪れた。一枚岩と称されてきたはずの自然調査団に、初めて修復不可能な亀裂が生じた。史上最大の観察を決める討議は、史上最悪の事態を招いてしまったのだ。空中分解した調査団に未来はあるのか？団長の心中を暗示するかのよう、会議室の窓越しには地平線に沈まんとする落日の太陽……



「南極展」会場内風景